2020.07.15

松沢哲郎のこと（2）

小嶋祥三

松沢はその後チンパンジーの研究を行ったが、初めは視知覚の実験をしていた。その後、数の理解の研究を行ったが、やがて、彼の研究の主眼は、チンパンジーがヒトに近いことを示すことに移っていったと思う。そのために、学問的な厳密さは棚に上げて、広報していたように見えた。彼の研究で一般の人にも知られているのは、チンパンジーの数の理解に関する研究だろう。チンパンジーが画面に短時間提示された 1-9 の数字を大きさの順序で反応する実験だ。これはチンパンジーが示した高い能力であることは同意できる。問題は、それを強調するあまり、この課題に未経験のヒトの結果を一種のコントロールとして提示したことだ。これにより、チンパンジーの高い能力を際立たせたのだが、学問的にはこのヒトのデータはコントロールになり難い。無論、一般の理解の促進、ウケ狙いだという言い訳はあるだろう。しかし、研究者としての姿勢には疑問を持ってしまう。

わたしは、チンパンジーを一人、二人呼び、ヒトを同一視しかねない松沢の主張には、ついていけなかった。たとえ、チンパンジーがヒトに特有な行動の、萌芽的なものを行っても、それを以ってチンパンジーをヒトと呼ぶには無理がある。松沢は、ヒトとチンパンジーの遺伝子配列が 98-99%一致することも、チンパンジーがヒトに極めて近い証拠として挙げていたが、この場合はコントロールを提示していない（例えば、ニホンザルとヒトはどれだけ違うのだろうか)。一時の興味が治まれば、僅かな遺伝子の違いが、ヒトとチンパンジーの大きな違いをもたらしていることに興味が向くのは自然のことだ。チンパンジーがヒトに近いことは当然なのだが、彼らをヒトと呼ぶには違いが大きすぎるのだから。無論、耳目を驚かすために、敢えてチンパンジーを人と呼んだのかもしれない。しかし、わたしは松沢の研究者としての姿勢に疑問を感じた。

松沢がヒトとチンパンジーの近さ、チンパンジーの高い認知能力を強調することは、結果として、チンパンジーが苦手な側面の研究をなおざりにしたかもしれないと思った。極端な言い方をすれば、チンパンジーのすばらしさ、ヒトとの近さを示さない研究は、重要なものでないと考えていたように思えた。数の研究をしているならば、チンパンジーが足し算や引き算をできるか、あるいは、桁上げを理解するかなど、興味深い問題が多いだろう。室伏先生は足し算の訓練をしていたが、十分な成果を上げられなかったと記憶している。継続して検討してもよかったのではないか。

以上述べたことは、わたしの松沢に対する不満だが、これらの点で彼が大きく道を外したとは思ってい。しかし、松沢と友永が共著者になっている、チンパンジーのじゃんけんの論文は、この二人が論文をチェックしたのかを、疑うほどの杜撰なものだった。わたしはこの論文について、このホームページで何回か論じているので、詳細は繰り返さない。かれらはチンパンジーがチンパンジーとヒトの手の映像（グー、チョキ、パー）で、じゃんけんに含

まれる 3 項の循環的な関係を理解できたと報告した。2017 年 8 月 22 日の京都大学のホームページには、松沢によるこの実験の紹介がある。そこでは、チンパンジーの循環的な関係の理解に力点があるように読めた。、しかし、論文に述べられているように、ラット、ハト、サルでも循環的な関係の理解は可能であり、さらに、チンパンジーの結果はラット、ハトと同じ傾向であった。

松沢はこの点に言及して、チンパンジーの実験がラット、ハトのそれとどういう点で異なるのかを、明確にすべきだったろう。彼らの実験がラット、ハトと異なるのは、多数の手の映像で 3 項の循環的関係（じゃんけん）を検討した点にある。純粋に循環的関係を検討するのなら、特に手を利用する理由はない。○、△、□でもいいだろうし、好ましい。手を利用した結果は、訓練の最終段階でも、新しい手を導入すると、じゃんけんの理解に 1 か月はかかるというものだった。恐らく、実験の前段階で、さまざまなグーを同じ「グー」（われわれはこれを「グーの概念」と呼ぶ。チョキ、パーも同じ）ととらえる訓練を、見本合わせ課題などでやっていれば、結果は違ったかもしれない。概念がないので、チンパンジーは各刺激対の細部の違いに着目して課題を解決するため、刺激が変わると振出しに戻り、獲得までに多くのセッション数を要したのだろう。これはヒトのじゃんけんの理解とは異なる。

松沢はこの論文を広報したようだ。マスコミの報道は、チンパンジーがじゃんけんを理解したとか、チンパンジーの認知能力は、ヒトの 4 歳のそれに匹敵するというもので、チンパンジーがヒトの 4 歳児と同じように、じゃんけんを理解するという印象を与える内容だった。これには、わたしは正直驚き、松沢の研究者としての姿勢に強い疑問を抱いた。わたしの批判は、彼らのチンパンジーはヒトの 4 歳児と同じように、じゃんけんを理解するという主張に対応するものだ。わたしの批判は細かすぎる、厳しすぎるという意見があるかもしれないが、研究とはそういうものだと答えるだけである。一般の人に研究に興味を持ってもらうことは重要だが、研究内容は正確に伝えなければならないだろう。

そして、この論文が掲載された雑誌 Primates の、最も注目された論文として表彰されたと、高等研究院のホームページに載っていた。はては、京大の総長賞まで受賞したりしていた。専門家が読めば、とてもそのような内容の論文ではないことはすぐに分かると思う。山極京大総長は霊長類の研究者である。わたしは山極総長、霊長類研究所、高等研究院、京都大学、そして日本の霊長類研究、Primates 誌の汚点になり、評価が落ちることを危惧した。松沢はこのことをしっかりと考えるべきだ。

松沢がこのようなことを、平然と行えることにわたしは驚いた。わたしは松沢が研究者としての道を踏み外したと思った。彼は全能感を持ち、自分には「すべてが許されている」と思っていたのだろうか。これは、今回の研究資金の問題に関する京大本部の報告にあった、遵法精神の軽視に通じることだ。